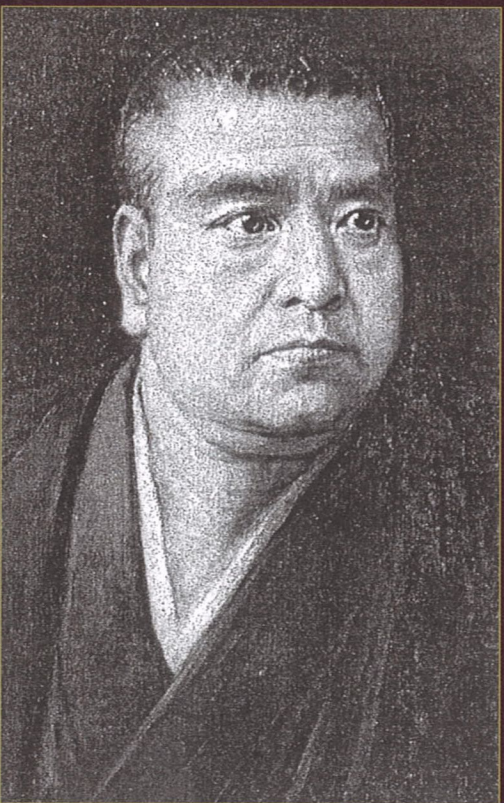


西南戦争警視隊戦記

洋の東西でテロリズムが横行する今日、かつて治安を守るべく戦地に赴いた多くの警察官がいたことを教えてくれる本書は、まことに名著の名に値しよう。



予約限定出版

ている。

鎌田は吉田新町に進出していた警視隊の動向を、探偵を放って把握することに努めたであろうし、また、一揆に心をよせる地元民の通報も受けたと思われるが、佐川隊の出撃をいち早く察知していたようである。黒川村の前方約一軒の高原の要所に兵を二分して配備し、進撃してくる佐川隊を待伏せ、挾撃態勢をとっていた。

十八日の夜明け、佐川隊は濁川の川辺に達した。阿蘇山に源を発する濁川は屈折をくり返しながら西に向かって流れ、やがて白川の本流に注いでいる。薩軍の哨兵は、濁川を渡り始めた佐川隊を発見、合図の喇叭を吹き鳴らした。佐川警部は薩軍に備えのあることを知って、直ちに散開を命じた。高野原といわれるその地帯は、複雑な起伏を見せる阿蘇の高原で、かやなどが繁茂し、下から上の通視はきかない。

佐川隊が薩兵の所在を見極めるべく、這うようにして登り進んだとき、高地左右の雑木林に潜伏していた薩兵が、一斉に銃を発射して戦いが始まった。薩兵は林の茂みに身を潜め、攻め登る警視兵を見下ろして狙い撃つのに反し、警視兵は草原に身をさらし、敵陣を見上げて射撃しなければならなかった。その不利な状況下で警視兵は闘志を燃やして戦いを挑み、高野原の原野に一進一退の激戦を展開して、勝敗は容易に決しなかった。

陣頭に立って兵を鼓舞していた佐川警部は、元湯の谷温泉昇り口付近の窪道で薩将（薩軍小隊長鎌田雄一郎か）と遭遇した。佐川は敵将を斃して戦局を一挙に有利に展開しようとしたのであろう、正宗の名刀をひき上げて、敢然と薩將に立ち向かった。

日本刀を振りかざした佐川と薩將との凄まじい一騎打ちが始まった。

折から朝日の昇る時分で、

刀身がキラリキラリとひらめき、火花をちらして相い戦う有様は壮絶の極みであったという。この勝負を五、六分離れた東側のやぶに潜んで見ていた地元の一揆兵長野嘯は、薩將危うしと見たのか、所携の銃を構え、佐川警部に狙いをつけた。照準を定め、至近距離から発射した銃弾は佐川警部の胸部を貫通し、佐川はその場に斃れた。即死であったという。

子じめ備えを固めていた薩軍に要撃され、不利な状況下で勇戦した警視隊は、暫くは互格の勢いを示していたが、腹背からの挟撃を受けて苦しい戦いを続け、高野原を血に染めて凄絶な死闘を展開すること五時間余に及んだ。既に佐川警部をはじめ二等少警部小林一作以下次々と斃れ、負傷した二等少警部騎西安遷らを背負って濁川のほとりに後送する頃は、弾薬も底をついていた。

薩軍は勢いを増して前進し、いよいよ猛烈な銃火を浴びせてくるが、警視隊は支えることが困難になった。敗色濃厚となった午前十時頃、退却に決したときは手持ちの弾薬を打ちつくし隊形は崩れ、死傷者を搬送



激戦のあった黒川口古戦場一帯

西南戦争警視隊戦記

略目次

序章 警視隊戦記提要

緒言

本書の構成

警視隊と別働第三旅団

警視官の派遣人員

警視官の武官任命

第一章 警視庁と兵術演習

警視庁の創設

警視庁の銃器装備

佐賀の乱と警視隊

警視庁の兵術演習

征台の役

政府の内外政策

神風連の変、秋月の乱、萩の乱と警視隊

新式銃の装備

警視局の設置

第二章 私学校激派の反乱計画

中原警部ら帰県同人の帰郷

鹿児島私学校

私学校の勢威の伸長と拳兵準備

熊本・長崎両県警の鹿児島探偵

東京における鹿児島不穩の風説

士道に徹した帰県同人

帰県の趣意

帰県同人の成り立ち

帰県同人達の準備行動

帰県同人の説得活動

私学校党の弾薬掠奪事件

松山信吾警部の鹿児島脱出

綿貫、神足両警視隊の熊本入城

薩軍の熊本城総攻撃

熊本の党薩諸隊

薩軍の熊本城長期攻囲策

鎮台の攻襲偵察

拋塁対戦(一)

城兵の段山攻略

拋塁対戦(二)

城兵の京町口出撃

拋塁対戦(三)

突圍戦

征討軍の熊本城連絡

第五章 植木口警視隊

田原坂

第一次植木口警視隊

警視抜刀隊の編成

田原坂の斬込み

横平山の戦い

田原坂陥落

第二次植木口警視隊

船島の地名について

植木・木留の戦い

戦場の人肉嗜食嚴禁の建議

満田小隊の福岡方面派遣

吉次峠・木留攻略

中央突破作戦

萩追方面の持久戦

第六章 別働第三旅団の熊本進撃

衝背軍の編成

衝背軍の八代占領

八代土族の協力

鏡・氷川の戦闘

三月二十三日の激戦

川路大警視の京阪出張

佐川警部の警視庁奉職

坂梨滞陣

中津隊の決起

退守から攻勢へ

坂梨嶺の戦い

阿蘇駐屯から御船転進

戦跡に建立された豊後口警視隊の慰霊碑等

第八章 征討支軍の鹿児島進駐

鹿児島城下

鹿児島進駐部隊の発遣

進駐部隊の初期活動

岩村県令の着任

薩軍の鹿児島襲撃

鹿児島市民の救恤活動

婦順勸奨

人事交流その池

情報収集活動

鹿児島北方作戦

鹿児島南方作戦と別働第三旅団の連絡

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

鹿島嶺の戦い

蒲生進撃

国分北部の戦い

都城進撃

荒磯嶽の戦い

田辺中佐解団の心慮

十文字の戦い

都城攻略

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

宮崎進撃

第十二章 鹿児島警視出張所

別働第三旅団連絡直後の鹿児島

の状況

県下諸郷の鎮撫活動

鹿児島警視出張所の開設

突圍薩軍の鹿児島突入と警視官

らの殉難

鹿児島米蔵警視隊の編成と防衛戦

西郷の巡査捕縛の檄文と各郷の

対応

征討軍の城山包圍と警視隊の鎮

撫活動

城山陥落

戦乱後の警察活動

薩軍関係者に対する処分

警視出張所の閉鎖

付録

「警視庁(局)職員録」よりみ

た西南戦争前後の幹部一覧表

第三章 西郷隆盛暗殺謀議事件の捏造

薩軍の拳兵

拳兵名義に必要だった西郷暗殺

事件

帰県同人らの就縛

拷問による虚偽の自白強要

虚偽の口供書作成

野村綱の自訴と拷問

薩軍の拳兵と征討令の発布

鹿児島差遣勅使と護衛警視隊ら

による中原以下の救出

帰県同人らの東京移送

帰県同人に対する臨時裁判所の

審判

第四章 熊本籠城警視隊

九州派遣警視隊の出陣

熊本的情勢

熊本鎮台の沿革

熊本鎮台の守城準備と県庁の措置

本書は西南戦争における警視隊(警視官で編成した部隊)の活躍を多くの史料

を使用して描いた本である。この戦争に

おける警視隊の動向については抜刀隊の

イメージだけが先行し、有名な割にはあ

まり知られていないばかりか、それを本

格的に研究した書籍は本書しか無く本書

は西南戦史における警視隊の動向を調べ

る上でまず参照すべき第一級の研究書と

なっている。

著者の後藤正義は、警視庁巡查を拝命

後三十五年間警視庁に勤務し、警視昇進

後警視庁第二機動捜査隊長を最期に退職

した警視官である。

著者が本書を執筆した動機は、西南戦

争の原因が、大警視川路利良が少警部中

原尚雄らに西郷隆盛暗殺を内命して派遣

したことにあったといい、本書でも特に

一章を割いてこの節が誤りであることが

実証的に証明され、目玉の一つとなつて

いる。

史書として優れた価値を有し、西南戦

争研究には常に座右に置くべき基本文献

であるが、今では古書市場でも滅多に目

に触れる機会のない稀覯本となり、古書

価三〜五万円の高値も付いている。

来年は西南戦争から一四〇年目にあた

り、この節目の年を前にマツノ書店が本

書を復刻することは、まことに時宜を得

たことといえよう。この機会にゼヒ、多

くの読者が本書を繙かれることを期待し

たい。

(歴史研究家・長南政義氏から賜った

一文を、本人のご了解のもと、当方でま

とめたものです。)

名著『西南戦争警視隊戦記』の復刻を喜ぶ

作家 中村 彰彦

私事を述べることから筆を起すのをお許しただくと、私が明治初期の警視庁の動きや西南戦争における警視兵の活動を知る必要に迫られたのは、昭和六十三年（一九八七）のことであった。幕末会津藩屈指の闘将として知られ、西南戦争が勃発するや豊後口警視隊の副指揮長（一等大警部）として阿蘇で薩軍と交錯した佐川官兵衛の生涯を描く長編小説を書くことになったため、当時の警視庁の組織と動向を頭に入れておかねばならなくなつたのだ。

しかし、当時三十八歳だつた私は『警視庁史 明治編』と中村徳五郎『川路大警視』を読んでいた程度で、この方面の史料にどんなものがあるのか、さっぱりわかつていなかった。しかも私は独学で史伝文芸の世界に入った者だから、こういう場合に教えを乞える先輩や師もいない。

そこで私は幕末維新史研究の先達で、『鶴ヶ城を陥すな 凌霜隊始末記』の著者でもある藤田清雄氏にどうしたらよいか、と相談を持ちかけた。すると氏は、にこやかに応じて下さつた。

「私の友人に西南戦争における警視隊の動きを研究している男がいますから、近々の内に紹介しましょう」

その「男」が本書の著者後藤正義氏であり、昭和五十五年十月に警視庁を勇退された後藤氏は日本火災海上保険の顧問をしておられた。お好きだという鳥料理にお誘いして話を伺うと、後藤氏はいつた。

「私は今、警視庁草創期に苦勞された先人たちについて本を書くことにより、長年お世話になつた警視庁に少しでも恩返ししようと思つています。その本では佐川官兵衛の最期についても触れますので、刷り上がったら一冊進呈しましょう」

やがて昭和六十二年十月となり、後藤氏が約束通り送つて下さつたのがこの『西南戦争警視隊戦記』。四百字詰め原稿用紙にして約二千三百枚の大作のボリュームには圧倒された。だが、早速熟読するうちに後藤氏は警察大学の本科と研究科とを卒業しておられるだけに実によく史料を読んでいること、練達の文体の持ち主で、難しく書けばいくらでも難しくなることろをこなれた読み易い文章で著述しておいでであることなどがわかつてきた。

私が『鬼官兵衛烈風録』（現在、日経文芸文庫）を無事脱稿することができたのも、半ば後藤氏の新研究のおかげであつたが、今回すでに幻の名著の一冊になりつつある『西南戦争警視隊戦記』が復刻されるといふ嬉しい知らせに接したので、改めて本書の構成を眺めてみよう。

「序章 警視隊戦記提要」に後藤氏みずから解説しているように、「第一章 警視庁と兵術演習」では明治七年（一八七四）一月に内務省所属として創設された東京警視庁では非常事態に備え、陸軍士官の指導によつて軍事訓練をおこなうことをもつて旨とした。同年二月に佐賀の乱、九年十月に神風連の乱、秋月の乱、萩の乱が連続して発生したことから知れるように世の中には不平士族があふれていたため、警視官には戦闘参加能力が求められたのだ。

「第二章 私学校激派の反乱計画」「第三章 西郷隆盛暗殺謀議事件の捏造」では、西郷隆盛を師として結集した鹿児島私学校の激派の面々が挙兵理由として中原尚雄らの警視官による西郷暗殺計画を挙げたものの、これはまったくのどつちあげだつた事実が提示される。実のところ中原尚雄らは私学校党の暴発を止めさせようとして鹿児島入りした者なのに、西郷への刺客

とみなされて捕らえられ、ひどい拷問を受けた果てに口述書（自白書）を偽造されたのである。本書は拷問した側とされた側の回想やそれぞれがその後どうなつたかという点までが追求されており、この部分までで優に新書一冊分以上の読み応えがある。

「第四章 熊本籠城警視隊」「第五章 植木口警視隊」「第七章 豊後口警視隊」は、章題に明示された方面にそれぞれ分派された警視隊の戦史。いずれの章にも五十ページ前後が費され、丁寧かつ読み易く書かれているのが何よりの美点であろう。

「雨は降る降る陣羽は濡れる 越すに越されぬ田原坂」と歌われた田原坂の激闘については第五章をお読みいただきたいが、この方面では薩軍の抜刀斬り込みに対抗すべく警視抜刀隊が組織されたことが知られている。本書ではその発案者、実行者から刀剣を集める苦勞にまで筆が及んでいるのに驚かされる。後藤氏は各署の刑事防犯課長、捜索第三課課長代理なども歴任されておいでだから、捜査ばかりかこうした調査にも手を抜かないのだ。

さらに「第六章 別働隊第三旅団の熊本進撃」では、別働第二旅団の参謀山川浩中佐（元会津藩家老、佐川官兵衛の旧友）が孤軍籠城戦を続けていた熊本鎮台との連絡に成功したこと、陸軍少将兼大警視として八代に到着した川路利良が別働第三旅団を編成して同鎮台に入ったことなどが語られる。

飛んで「第十章 宮崎攻略と別働隊第三旅団」の解団では、川路少将が明治十年六月二十八日、病を理由に東京帰還を申請して許された謎が解き明かされる。川路は薩摩人であるため、私学校党からは西郷を裏切つた最大の敵とみなされていた。その点を考え合わせると、戦況は好転したとはいえ別働第三旅団を鹿児島へ進撃させては薩軍の敵愾心を煽ることになる、と陸軍上層部は判断。別働第三旅団を解団することにしたというのだ。

ここで記述が終わつてしまえば、定説通りの書き方に終始することになる。後藤氏は警視庁OBだけに、警視官の人少なになつた東京では警察活動に不慣れな新規採用者が相対的に増加し、社会不安の種となりつつあつたことも川路を帰京させた理由のひとつだ、と指摘することも忘れていない。

つづく「第十一章 豊後口後続警視隊」について注記しておきたいのは、三月十八日に佐川官兵衛を戦死させた豊後口警視隊の後続として豊後口第二号警視隊が編成され、これには警視徵募隊も加わつたことである。後者に属する徵募巡查とは急雇いの警視兵のことで、二番小隊半隊長警部補として記述される藤田五郎とは、元新選組の一番隊長斎藤一のこと。余談ながらその藤田五郎らが斬り込んで大砲二門を鹵獲した法師山の薩軍陣地跡は、竹田の岡城址に登れば望見することができる。

最後の「第十二章 鹿児島警視出張所」は、別働第三旅団に代わつて編成された新撰旅団が城山を陥落させるまでを語り、合わせて戦乱終結直後の警察活動を紹介している。薩軍に与して捕縛されるか帰順するかした者は、実に四万三千五百六十二名。しかし、有罪とされた者はわずか六パーセントの二千七百六十四名に過ぎなかつたという。

付録として『警視庁（局）職員録』よりみた西南戦争前後の幹部一覧表」が末尾に添えられ、出征者氏名のほか族籍、官位官職、戦傷・戦死・生還の別までリスト・アップされているのも目配りがよい。

洋の東西でテロリズムが横行する今日、かつて治安を守るべく戦地に赴いた多くの警察官がいたことを教えてくれる本書は、まことに名著の名に値しよう。

ちなみに来年（二〇一七）は西南戦争が起こつてから百四十年目にあたる。